

意。し姿のまにこにをとお

学食のCO₂排出量可視化 第2弾 利用者の行動変化分析



大豆ハンバーグ(左)と、ハンバーグを紹介する学生メンバー(昨年12月4日、1A棟食堂で)

学食メニューにカーボンフットプリント(CFP)を表示し、温室効果ガス排出量を見える化するプロジェクトの第2弾が昨年11月18日〜12月20日、1A棟

食堂「TSUKUBA T A B L E」と医学食堂で実施された。食品の温室効果ガス排出量を学生や教職員が知り、環境に配慮した行動をとるきっかけになればと、「DESIGN THE FUTURE」機構(DTF機構)が主催した。CFPは原材料調達から生産、運搬、廃棄、リサイクルに至る製品・サービスのライフサイクル全体を通して排出される温室効果ガスの排出量を二酸化炭素(CO₂)に換算して表示する取り組み。筑波大のプロジェクトでは、調理までの過程を対象にCFPを算出している。

表示されるのは昨年2月26日〜3月8日に学内3カ所の食堂で実施して以来。前回は期間が短く、期末試験後となったこともあり、利用者が限られた。今回は期間を倍以上とし、期末試験前に始めた。また、期間中の12月2〜6日をスペシャルウィークと位置づけ、肉を大豆ミートに代替したハンバーグやハムカツなど低CFPメニューを日替わりで提供した。

さらに、1A棟食堂と医学食堂でメニュー表示の方式を変えた。1A棟食堂のメニューにはCFPの数値に加え、数値を3段階に色分けして示す「CFP表示ラベル」を導入した。カッ

カレーは高CFPなので赤色、チーズギョーカカレーは低CFPなので緑色など、ラベルの色によりCFPの高低が分かる。前回に引き続き、CFPは一般社団法人サステナブル経営推進機構が算出し、対象となった二つの学食を運営するシダックスコントラクトフードサービス(本社・東京都渋谷区)がメニュー提供などで全面的に協力した。

本プロジェクトの実施にあたっては、協力してくれた学生をDTF機構のウェブサイトなどで広く募集した。その結果、「環境サークルREVELOP」や「ECHO UT」などの学生団体の他、個人参加もあった。これらの学生メンバーがポスターや紹介ビデオの作成、メニュー表示などを担当した。CFP表示の効果は、アンケートや各メニューの売れ行き、イベント前後での学食からの廃棄物量の変化などの観点からDTF機構の教員と学生が協議して分析する予定だ。

DTF機構の西尾チツル機構長は「学生や教職員には、学食で感じたCFPによる『気づき』を、自分の生活に結びつけて理解してほしい。次は学生自ら、CFPの算出に挑戦してほしい」と話している。(主筆 奏太)地球学類1年、写真も)

を生かして、(ご関心のある)自然誌だけでなく、幅広い学問に取り組んでいたみたいで語った。また、英オックスフォード大などを例に挙げ、「郊外型の大学は寮で同世代の仲間たちともまねながら学ぶのが基本。希望を言えば、悠仁さまにも、寮で暮らしていた方がいいと思う」と述べた。

さらに、キャンパス内の街灯の増設や歩道・自転車道の整備を進めるとする一

新宿舍の設備充実を要望 全代会 副学長懇談会で

全学学類・専門学群・総合学域群代表者会議(全代会)の構成員と副学長ら教職員が学生生活や学修について意見交換する懇談会が昨年12月4日、1A棟で開かれた。学生宿舍のリニューアルや学生の意見の福利厚生への反映などがテーマとなった。

当初、学生宿舍は2025年からリニューアル事業が開始される予定とされていたが、学生生活課によれば、物価高などの影響でスケジュールは調整中だ。宿舍費は現在、一般単身改修棟が約2万円だが、より高額になることが予想されている。

全代会は調査を踏まえ、新宿舍ではバス・トイレ別設備、エアコン、室内洗濯機置場を各居室の必須設備とすることを提案した。本

この他、全学計算機システムを利用した印刷、総合学域群のカリキュラム、昨年開校したマレーシア校についても議論された。

筑波大の学生は図書館や学生用パソコンがある学内のサテライト室の印刷機で、所属学類が定めた枚数まで印刷できる。印刷可能枚数を予告なしに削減した学類があったため、全代会は「メールなどで事前周知してほしい」と要求した。

全代会の近藤拓未議長(情科3年)は「大学側と意見交換できて有意義だった。学生の意見を大学に伝え続け、対応を促したい」と語った。(主筆 奏太)

キャッシュレス決済対応 一の矢宿舍の洗濯機



キャッシュレス対応の洗濯機を利用する学生(2月11日、一の矢学生宿舍で)

一の矢学生宿舍1〜4号棟の洗濯機32台が昨年12月、キャッシュレス決済に対応した洗濯機に更新された。今後半年間かけ、学生宿舍の全ての洗濯機がキャッシュレス決済対応のものに更新される。1回の洗濯料金は200円が変わり

は、所属学生がどのように学生組織に参画するかが話し合われた。全代会が学生組織の概要を同校の学生に説明した上で、同校と筑波キャンパスの学生が参画方法について具体的な協議を進めることになった。

全代会の近藤拓未議長(情科3年)は「大学側と意見交換できて有意義だった。学生の意見を大学に伝え続け、対応を促したい」と語った。(主筆 奏太)

堅斗(心理学類1年、写真も)

悠仁さま 筑波大合格

生物学類にご入学へ

秋篠宮ご夫妻の長男悠仁さま(18)は筑波大附属高校3年IIが筑波大の生命環境学群生物学類に合格された。宮内庁が昨年12月11日に発表した。悠仁さまは同月28、29日に行われた筑波大の推薦入試(学校推薦型選抜を受験されていた)

募集人員は22人。全国の学校から推薦された64人が受験し、競争倍率は約2.9倍だった。

悠仁さまのご入学について、永田恭介学長は昨年12月26日の定例記者会見で「(ご入学は)喜ばしい。伸び伸びと勉学に励んでいただきたい。総合大学の強み

を生かして、(ご関心のある)自然誌だけでなく、幅広い学問に取り組んでいたみたいで語った。また、英オックスフォード大などを例に挙げ、「郊外型の大学は寮で同世代の仲間たちともまねながら学ぶのが基本。希望を言えば、悠仁さまにも、寮で暮らしていた方がいいと思う」と述べた。

方、今後の警備については可能なことについては協力させていただくが、大学の理念である『開かれた大学』が壊れるようなことはしない」と説明した。



「いや、私なんか皆様に偉そうに語る事はないんで……ほんとすみません」

私は筑波大の卒業生ですが、何かが優れていたわけではなく、いろいろなことを経験していくうちに、偶然性の果てに流れ流れていろいろなお仕事をしています。このような生き方もあるんだと一つの道として示すことができれば幸いです。

大学生生活では卒業でも部活でも、圧倒的上下関係、理不尽に次ぐ理不尽と無理無茶無謀を乗り越えて、手加減、発狂をものすく、という日々を過ごしたおかげで、社会人になってもアルハラ以外の過酷な環境や理不尽さに耐えられたのは、本当に貴重な経験でした。

漫画『べらんずる』の恋愛要素を引いたような堅斗(心理学類1年、写真も)

貴重な「今」を大切に



中東コーディネーター
鷹鳥屋明さん

「さあ、自分の好きなことに全力になってください。卒業して15年経っても、大学時代にやりたい先輩からの経験に基づいたアドバイスですよ!」(平成18年度人文学類卒、写真は本人提供)

四重奏の調べに酔う

つくばリサイタルシリーズ



息の合った演奏を披露したほのカルテット＝ TRS 実行委員会提供

つくばリサイタルシリーズ「ほのカルテット」弦楽四重奏の魅力が解き明かす「」が1月25日、つくばカピオホール（つくば市竹園）で開かれた。約210人が足を運び、四つの弦楽器から生み出される調和のとれた響きに聴き入った。

同シリーズは筑波大の有志学生で構成される実行委員会が、クラシック界で活躍する一流の演奏者をつくばに招いて開催する連続コンサート企画で、今回は15回目となる。

ほのカルテットのメンバーは岸本萌乃加さん（ファーストバイオリン）、林周雅さん（セカンドバイオリン）、長田健志さん（ビオラ）、蟹江慶行さん（チェロ）の4人。2018年に

結成された。23年には室内楽団体の登壇とされる大阪国際室内楽コンクールで第2位となった実力を持ち、YouTubeでのコンサート発信にも力を入れている。

公演は実行委員会の江藤光紀准教授（人文学部）が書き下ろした「弦楽四重奏第4番」シュンポジョンに開幕した。東西の哲学の対立と融和が3楽章にわたって表現された楽曲だ。

演奏後は林さんと蟹江さんが弦楽四重奏の魅力やカルテットの結成秘話など、軽快なトークを披露した。2曲目のブリテン作曲「弦楽四重奏曲第2番」に続き、演奏会を締めくくったのがベートーベン作曲「弦楽四重奏曲第7番」ラズモフスキー第1番だ。

壮大なスケール観のある第1楽章、スケルツォの第2楽章を経て、哀愁ある第3楽章が丁寧に弾き上げられた。第4楽章は躍動感ある展開でフィナーレを迎え、観客を魅了した。

林さんは「観客の集中した視線を感じられ、演奏してよかった」と話した。

実行委代表の関珠暖さん（目黒3年）は「日本ではオーケストラなど比べ弦楽四重奏はなじみが薄い。が、演奏とトークで魅力が伝わったと思う。今後もクラシックを身近に感じられたい」と語った。（大竹翔二 人文学部1年）

オーケストラ・ウィル定演

難曲を大編成で熱演

つくば市を拠点に活動する管弦楽団「オーケストラ・ウィル」の定期演奏会が2月9日、ノバホール（つくば市吾妻）で開かれた。ロシアの作曲家、ショスタコービッチの作品を中心に全3曲が演奏され、来場した約300人を魅了した。

オーケストラ・ウィルは、演奏後は林さんと蟹江さんが弦楽四重奏の魅力やカルテットの結成秘話など、軽快なトークを披露した。2曲目のブリテン作曲「弦楽四重奏曲第2番」に続き、演奏会を締めくくったのがベートーベン作曲「弦楽四重奏曲第7番」ラズモフスキー第1番だ。

タペストリー作りで交流

紅茶好きの学生集まる

いれ終わった紅茶のティーバッグを使ってタペストリーを作るワークショップが1月20日、5C棟で開催された。企画者を含む計9人の参加者がそれぞれ好みの紅茶を持ち寄り、紅茶タペストリー作りを通して交流を深めた。

紅茶タペストリーは、使用後のティーバッグをカラフルな紙で包み、毛糸などで飾りつけた枝につるして作る壁掛け装飾だ。

参加者は互いに持ち寄った紅茶を飲み比べたり、菓子を食べたりしながら、タペストリー作りを使う枝や飾りつけを選んだ。

金色の紙でティーバッグを包んだらびややかなものから、薄い黄緑色で統一された落ち着いたものまで、参加者それぞれが唯一無二のタペストリーを制作し、その後記念撮影をした。

参加した医学部2年の女性「お気に入りの紅茶を見つけたって参加した。他学類の学生との交流が楽しかった。初めてのタペスト



自分ならではの紅茶タペストリーを作る参加者（1月20日、5C棟で）

だ。続く2曲目は同じくショスタコービッチの「交響曲第1番」。交響曲では珍しいピアノにも主体が置かれ、不穏な音色と爆発したような激しい音色の繰り返しが先導する。ソ連時代を生きた作者が政府の抑圧下で感した心の葛藤が表された。

そして3曲目にはエルガー作曲の「独創主題による変奏曲『エニグマ』」が演奏された。主題はバイオリンとクラリネットによるしつとりと優雅な旋律。これに作家の妻や友人をモ

リ作りだったが、企画者分がかりやすく教えてくれた面白かったと語った。

このイベントは東海林咲さん（芸専1年）が筑波大の学生応援プロジェクト「T-ACT」の一環として企画した。「冬季は気分が落ち込みやすく、楽しさを作りたい」という。紅茶好きで、空間演出デザインに興味があったことから、空間を彩るタペストリーと紅茶を組み合わせた企画となった。

東海林さんは「参加者には感謝しかない。さまざまな紅茶を持ち寄ってくれ、自分が知らなかった新たな紅茶の世界を知ることができた」とうれしそうに語った。（惣田賢斗、写真も）

チーフとした14の変奏曲が続く。建築家の友人をイメージした第7変奏は大きく雰囲気を変え、力強いティンパニとトロンボーンが響いた。

同オーケストラのコンサートミストレスを務める湯田茜音さん（医学部1年）は「15回目の節目で、大編成で難易度も高い3曲を選曲した。先輩方に助けられながらも楽しく演奏できた」と語った。（山本貴世）



「交響曲第1番」ではピアノがステージ中央に置かれた（2月9日、ノバホールで）＝川畑悠成撮影

短歌

筑波大

授業ないけど学食に行ってみる
そこは春のままのにぎやか



授業が少ない。大学構内を行き交う人々の姿もまばらとなり、いつそう寒さが際立つようだ。そんな時期にもお昼過ぎの学食は相変わらず活気に満ちている。「何を食べるか」以前に「どの食堂に入るのか」と感ずる経験は、他の学食ではそう当たり前ではないらしい。普段はお世話にならないような食堂に足を延ばし、初めてのメニューに舌鼓を打つというのもこの季節ならではの楽しみかもしれない。（東風えまり 人文学部3年、写真も）

『いまを生きる』

ピーター・ワイアー監督

ちなみに、自分が本当にやりたいことをつかみ、自分の生き方に自信を持つことの大切さを説く。それまで大人の言うことに従ってきた生徒たちは、次第に自分の心の声に耳を傾けていく。

生徒で主人公のニールは、先生がこの学校の生徒だった頃に結成したサークルの存在を知る。その名はDead Poets Society（「死せる詩人の会」。この映画の原題でもある）。学校近くの洞窟で昔の詩を読み合うという会である。ニールは仲間たちを誘い、「死せる詩人の会」の活動を始める。彼らは洞窟の中で、詩を朗読し、自分たちの夢や希望を語り合い、行動し始める。

ニールは演劇に自分の夢を見出し、ある舞台の主役の座を射止める。しかし、彼の父親は彼を医師にさせたがっており、彼の演劇への志を認めない。ニールは舞台の本番を見事に演じ切ったが、父親は本番が終わったその足で彼を家に連れて帰る。

それから悲劇が起る。悲劇の原因はキーティング先生が生徒たちを扇動したことみなされ、先生は学校を去る。

照井章 准教授（計算機数学）



数理物質系・准教授。筑波大学院数学研究科博士課程中退。博士（理学）。筑波大数学系助手などを経て2011年より現職。趣味でホルンを吹く。筑波大ピアノ愛好会顧問。

洞窟で昔の詩を読み合うという会である。ニールは仲間たちを誘い、「死せる詩人の会」の活動を始める。彼らは洞窟の中で、詩を朗読し、自分たちの夢や希望を語り合い、行動し始める。

ニールは演劇に自分の夢を見出し、ある舞台の主役の座を射止める。しかし、彼の父親は彼を医師にさせたがっており、彼の演劇への志を認めない。ニールは舞台の本番を見事に演じ切ったが、父親は本番が終わったその足で彼を家に連れて帰る。

それから悲劇が起る。悲劇の原因はキーティング先生が生徒たちを扇動したことみなされ、先生は学校を去る。

た。当時、さまざまな自由を感じた米国生活の最後はこの映画を見て、米国でも、規律や大人の価値観に縛られた、自分と同年齢の少年たちが描かれていたことに驚くとともに、自分の心の声に耳を傾けることの大切さも感じました。

皆さんは、今、自分の心の声に耳を傾けていますか？ 皆さんが今、またはこれから本当にやりたいことを心の声から見つけ出し、それに向かって一歩を踏み出すことを願っています。私も年が改まるたびに、仕事でも趣味でも「今年も（小さなことでもいいので）何か新しいことをやろう」と思い、日々チャレンジしています。

筑波での青春を胸に 羽ばたくアスリート

昨年のパリ五輪では35人の筑波大関係者が選手として出場した。日本のスポーツ界をけん引する選手を輩出し続ける筑波大から、今季も多くのアスリートが新たなステージへの一歩を踏み出す。それぞれの分野で活躍した4選手たちが在学中の競技生活や今後の展望を聞いた。(松尾有姫)比較文化学類 山本貴世(国際総合学類 壬生奏太)地球学類 川畑悠成(知情報・図書館学類 福澤航介)フロンティア医科学学位プログラム

AS

佐藤友花(体専4年)



い、6歳でASを始めた。小学4年時からASに種目を絞って、小学6年時には全国JOCジュニアオリンピックカップ大会で優秀選手賞を受賞した。高校2年時に初めて世界ジュニア選手権の日本代表となり、3年時には年別のアジア大会でチーム・個人合わせて計5個の金メダルを獲得し注目された。筑波大に進学したのは国立大で唯一ASができる環境が整っていたから。入学直後に東京五輪代表の補欠に選出された。弟の陽太郎(体専2年)と混合デュエット(MD)で世界選手権を目指していたため戸惑

2022年には目標だった世界選手権(ハンガリー・ブダペスト)への出場がなかった。MDのTR、フリールーティン(FR)で5位、チームのTRで2位、FRで3位となった。「姉弟ペアでメダルを獲得でき、競技人生の中で一番うれしかった」と振り返る。



写真: スポニチ/アフロ
2022年世界選手権の混合デュエットフリールーティン決勝で演技する佐藤(左)

ロス五輪でメダル目指す

昨年夏のパリ五輪にアスリートとして出場した。筑波大に進学したのは国立大で唯一ASができる環境が整っていたから。入学直後に東京五輪代表の補欠に選出された。弟の陽太郎(体専2年)と混合デュエット(MD)で世界選手権を目指していたため戸惑

剣道

川合芳奈(体専4年)



しっかりと構えから相手を追い込み、真つす美しいメンを放つ。自身も得意技だと語るメンで、全日本学生・関東学生個人の団体4タイトルを全制覇した。4年時には日本代表として世界選手権に出場し、女子団体優勝に貢献した。静岡県出身。兄と姉の影響で、小学2年時に剣道を始めた。メキメキと腕を上げ、中学2年時に初めて全国大会に出場した。



昨年11月の全日本女子学生優勝大会で相手に向けて竹刀を構える川合

選手も指導も日本一へ

卒業後は母校の東海大付属静岡翔洋高校に教員として戻る。「剣道だけでなく、人間性も日本一の生徒を育てたい」と抱負を語る。自身も3年後の世界大会出場を目指すという、指導者としても、選手としても高みを目指し続ける。(写真は本人提供)

高校は「静岡の高校で日本一になりたい」という思いから、東海大付属静岡翔洋高校(静岡市清水区)に進学。当時は強豪校とは言えなかったが、浦田直也監督の個性を伸ばす熱心な指導に引かれたという。高校2年時の全国高校総体(インターハイ)は個人2位で、日本一にはあと一歩及ばなかった。3年時には、関東女子学生選手権(個人)での優勝を皮切りに、全日本女子学生選手権(個人)、全日本女子学生優勝大会(団体)で優勝を果たし、団体個人で念願の日本一を達成した。「ずっと目標にしていた日本一になれてうれしかった」と笑顔を見せる。4年時には、学生ながら日本代表の1人を選ばれ、

イタリヤ・ミラノで開催された世界選手権の女子団体戦に出場。出場した全3試合で勝利し、日本の9連覇に貢献した。「日本一を共に目指して入部し、高め合ってきた同期たちの活躍を見て刺激をもらい、自分自身の励みにしてきた」と、4年間の大学生活を仲間への感謝と共に振り返った。

卒業後は母校の東海大付属静岡翔洋高校に教員として戻る。「剣道だけでなく、人間性も日本一の生徒を育てたい」と抱負を語る。自身も3年後の世界大会出場を目指すという、指導者としても、選手としても高みを目指し続ける。(写真は本人提供)



写真: 8長浜功明
一昨年4月の関東学生トーナメント個人戦シングルスで準優勝した中村

敗戦乗り越え成長

テニス

中村元(体専4年)



ネットに詰めてきた相手の横を抜くパッシングが得意技だ。身長は175センチと上背はあまりないが、タイミングを見計らい、正確なショットを放つ俊敏なフレーが身上了。

小学5年時にクラブチームに所属して本格的にプレーを始めた。高校2年時にJOCジュニアオリンピックカップ全日本ジュニア選抜室内テニス選手権(室内インカレ)も、

個人戦シングルス1回戦で敗退し、「もう勝てないの

でいいかな」と諦めそうに

なった」という。だが、この

とき、自身も関東学生トーナ

メントのシングルスで準優勝



写真: 8長浜功明
一昨年4月の関東学生トーナメント個人戦シングルスで準優勝した中村

敗戦乗り越え成長

日本代表を目指す。

学した。実力に関係なく全員で練習する硬式庭球部の雰囲気が進学の決め手になった。大学1年時に出場した全日本学生選手権(インカレ)では個人戦ダブルスでベスト4に進出し、幸先の良いスタートを切った。

しかし、2年時は思うような結果がなかなか出なかった。2022年9月の関東大学リーグ2部最終戦は、自身がシングルスで敗れたこともあり、1部昇格を逃した。「チームに貢献したい思いが大きかった分、絶望的な気持ちになった」と振り返る。同年12月の全日本学生室内テニス選手権(室内インカレ)も、個人戦シングルス1回戦で敗退し、「もう勝てないの

でいいかな」と諦めそうに

ハンド

大山翔伍(体専4年)



身長183センチ、体重90キ。相手の動きを予測し、好セーフを連発するゴールキーパーの魅力にはまった。



昨年5月の春季リーグ戦で大きく構えゴールを守る大山

子どもが憧れる選手に

なりた」と考えるようになった。

4年時には主将に就任し、チーム作りを見直した。それまでは春の段階からレギュラーをある程度固定していたが、多くの選手に出場機会を設けるようにした。誰かが欠けても戦力を落とさないためだ。昨年12月のインカレでは、初戦でエースの大浦和馬(体専4年)が負傷し離脱したものの、関東大学秋季リーグで負けていた順天堂大に勝利し、3位となる結果を残した。

もって強くなりたいと、地元の強豪校だった県立藤代水高校(茨城県取手市)に入学。全国高校総体(インターハイ)準優勝、国民体育大会3位と実績を残してきた。

筑波大に進学したのは、練習メニューからチームの方向性まで選手が主体的に決めていることを知ったから。「自分で考えてプレー

できるようになる」という希望にかなう選択だった。2年時からレギュラーとして試合に出場し、楽しみながらプレーしていた。だが、3年時には、後輩が試合に出場する機会が増え、チームの中心メンバーとして責任を感じ始めた。「チームのためのプレー」を心がけ、後ろから積極的な声を出し、味方を鼓舞するようになったという。

この年の全日本学生選手権(インカレ)では前年のキーパーの魅力を

蹴球部 5 人がプロ内定会見

「地域沸かせたい」「人間性も成長」

サッカーのフロンティア入団が内定した筑波大学蹴球部部員の合同記者会見が昨年 12 月 2 日に大学会館で開かれた。角野志郎（体専 4 年）、田村蒼生（同 4 年）、沖田空（同 4 年）、半代将都（同 4 年）、福井啓太（同 4 年）の内定選手 5 人と小井土正亮（体育系・准教授）が登場した。



内定先のユニフォームを着て手を重ねる選手ら（昨年 12 月 2 日、大学会館で）＝川畑悠成撮影

サッカー

蹴球部は昨年の天皇杯 2 回戦で、当時 J1 首位だった FC 町田ゼルビアを PK 戦で破るジャイアントキリング（大番狂わせ）を達成。3 回戦でも J1 柏レイソルを延長戦にまで追い込み、大きな注目を集めた。

M F 角は J2 ジュビロ磐田に内定。昨季と今季の関東大学リーグでベストイレブンに選ばれた。また、U 23（23 歳以下）日本代表として「昨年のアジア大会にも出場した。『天皇杯の町田戦が印象に残っている。最後の PK では自分が想像していた以上の球を打てた」と振り返った。

J2 ロアッソ熊本に加入する半代は機動力と守備力を兼ね備えた F W だ。5 人の中で唯一高校サッカー出身で、2 年生までは試合にほとんど出場できなかった。「同期で自分だけメンバリー外だったこともあり苦しかったが、その期間があったからこそ今がある。誰よりも戦うプレーを見せられる選手になりたい」と語った。

D F 福井は、主将としてもチームをけん引。大学進学まで 9 年間所属していた J2 R B 大宮アルディージャに戻る形でプロデビューする。「1 年目からスタメンに入れるように自分の強みである後方からのボール運びをしっかり見せていきたい」と話した。

会見で小井土監督は「現在の日本代表には大卒選手が多い。仲間と切磋琢磨（せつさくさく）する中で味わった苦しさや悔しさは、大学生ならではの経験を生かしてプロの

ベスト 8 で敗退



宿敵明治に PK 戦で

サッカーの学生日本一を決める全日本大学選手権（インカレ）が昨年 12 月 7 ～ 28 日に行われた。筑波大は同 22 日、8 チームによる決勝ラウンドのノックアウトステージ 1 回戦で明治大と対戦。0 - 0 のまま延長戦でも決着がつかず、PK 戦（4 - 5）で敗れ、8 年ぶりの優勝はならなかった。

世界でも頑張っている中で、仲間と切磋琢磨（せつさくさく）する中で味わった苦しさや悔しさは、大学生ならではの経験を生かしてプロの

それを勝ち抜いた 8 チームによるトーナメント（フットアウトステージ）を合わせた方式になった。筑波大は C グループを 1 位で突破し、A グループ 2 位だった明治大とフットからシュートを打ったが、

それを勝ち抜いた 8 チームによるトーナメント（フットアウトステージ）を合わせた方式になった。筑波大は C グループを 1 位で突破し、A グループ 2 位だった明治大とフットからシュートを打ったが、

それを勝ち抜いた 8 チームによるトーナメント（フットアウトステージ）を合わせた方式になった。筑波大は C グループを 1 位で突破し、A グループ 2 位だった明治大とフットからシュートを打ったが、

小山 3 区で 11 位相当 「来年は筑波大で本戦」

箱根駅伝



海岸沿いで平塚中継所に向かって走る小山（1 月 2 日、神奈川県茅ヶ崎市で）

陸上



【神奈川県茅ヶ崎市で川畑悠成 11 知識情報・図書館学類 1 年、写真も】第 1001 回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）が 1 月 2、3 日に開催され、小山洋生（体専 3 年）が関東学生連合（関学連）チームの一員として往路 3 区（21・4 区）に出場した。関学連はオープン参加のため参考記録となるが、小山は区間 11 位相当の 1 時間 2 分 55 秒で 3 区を駆け抜けた。関学連に筑波大の選手が選出されるのは 2 年ぶり。

体 22 位、日本人 9 位となり、関学連のメンバーに選出された。小山は「うれしさをあつたが、自分だけ本戦を走ることになり、緊張感を感じることが大きかった」という。

筑波大は昨年 10 月の予選会で 18 位となり、5 年ぶりの本選出場を逃したが、小山は予選会の個人記録で全

20 位相当でたすきを受けとった小山はコース中盤で日本大を抜き、19 位相当で 4 区の平塚中継所（神奈川県平塚市）までたすきをつないだ。

小山は下り坂を生かし、前半 10 分をトラックの 1 方、自分の記録より約 30 秒早い 28 分 45 秒で走った。その後、後半は体力を奪われ、緩やかな上り坂となる 18 分地点の湘南大橋付近ではペースが落ちかけたが、「これまで経験したことがないほど大きな声援が励みになった」と振り返る。

小山が本戦に向けた調整を始めたのは、関学連のメンバー発表直後の昨年 10 月末。大学では駅伝を走る機会がなく、コースも未経験だったが、「最高のパフォーマンスを発揮すること」を目指したという。

中原・広瀬組全日本 8 強

五輪メダリストに善戦

バドミントンの日本一を決める全日本総合選手権が昨年 12 月 24 ～ 30 日に武蔵野の森総合スポーツプラザ（東京都調布市）で開催された。筑波大の中原鈴（体専 3 年）・広瀬未来（同 3 年）のペアが女子ダブルスでベスト 8 入りを果たした。

（立花泰太 11 生物学類 3 年）

バドミントン

第 1 ゲームは中原・広瀬ペアが得意とする低い弾道で素早く打ち合う低空戦に持ち込んだ。シャトルの浮きを抑える会場内の空気の流れも味方し、格上相手に 3 点リードで 11 点先取のインターバルを迎えた。後半は相手も低空戦に対応してきたが、21 - 19 で第 1 ゲームを先取した。続く第 2 ゲームではコートチェンジによる空気の流れの変化も



コート手前のシャトルを打ち返す中原（右）＝バドミントン部提供

あり、苦しい展開に。相手ペアが得意とする低い弾道で素早く打ち合う低空戦に持ち込んだ。シャトルの浮きを抑える会場内の空気の流れも味方し、格上相手に 3 点リードで 11 点先取のインターバルを迎えた。後半は相手も低空戦に対応してきたが、21 - 19 で第 1 ゲームを先取した。続く第 2 ゲームではコートチェンジによる空気の流れの変化も

あり、苦しい展開に。相手ペアが得意とする低い弾道で素早く打ち合う低空戦に持ち込んだ。シャトルの浮きを抑える会場内の空気の流れも味方し、格上相手に 3 点リードで 11 点先取のインターバルを迎えた。後半は相手も低空戦に対応してきたが、21 - 19 で第 1 ゲームを先取した。続く第 2 ゲームではコートチェンジによる空気の流れの変化も

あり、苦しい展開に。相手ペアが得意とする低い弾道で素早く打ち合う低空戦に持ち込んだ。シャトルの浮きを抑える会場内の空気の流れも味方し、格上相手に 3 点リードで 11 点先取のインターバルを迎えた。後半は相手も低空戦に対応してきたが、21 - 19 で第 1 ゲームを先取した。続く第 2 ゲームではコートチェンジによる空気の流れの変化も

あり、苦しい展開に。相手ペアが得意とする低い弾道で素早く打ち合う低空戦に持ち込んだ。シャトルの浮きを抑える会場内の空気の流れも味方し、格上相手に 3 点リードで 11 点先取のインターバルを迎えた。後半は相手も低空戦に対応してきたが、21 - 19 で第 1 ゲームを先取した。続く第 2 ゲームではコートチェンジによる空気の流れの変化も

広告欄

掲載のお問い合わせは
shinbun@un.tsukuba.ac.jp
までお願いします。

Who's Who?

「M-1」最優秀アマチュア

イツキさん(芸専4年)
乙女ブレンド
アソヌマさん(社学4年)

プロを目指し活動が続いていく乙女ブレンドのイツキさん(左)とアソヌマさん=本人提供

当初はアソヌマさんがボケでネタも書いていたが、デビュー前に先輩にネタを見せる

イツキさんの冷静でナンセンスなボケやぼそっとしたフリに、アソヌマさんがパワフルな早口で突っ込む。「ネタを音とリズムで覚えている。乙女ブレンドの漫才は音楽だ」という。

コンビの誕生は偶然だった。初めての出会いはお笑いサークル「つくばお笑い集団DONPAPA(現筑波大学お笑い集団DONPAPA)」の新歓イベントでネタを披露するつもりだったイツキさんにアソヌマ

さんが声を掛けた。他のメンバーは組む相手が決まっていたからだ。「ドラマチックの対義語のような結成だった」と2人は笑う。

プロ目指し活動続ける
漫才は音楽だ

と、ウケが悪く、ボケが突っ込みも逆が良いと助言された。その結果ボケとネタ担当がイツキさん、突っ込みがアソヌマさんというスタイルになった。

3年時にはこれを武器に漫才白本一決定戦「M-1グランプリ」で3回戦に進出。4年時には「早

乙女ブレンドのこれから更なる進化が楽しみだ。川畑悠成(知識情報・図書館学類1年)

「若い世代が種まく時」村上啓子さん(広島で被爆)



村上啓子さん

だろ。核廃絶に向けて努力してきた被爆者や被爆者を支えてきた人たち、これまで核廃絶に向けて思いを共有してきた全てに感謝している。被爆証言の継承方法が議論されるようになったが、今こそ考え始める時点を遅すぎる。若者



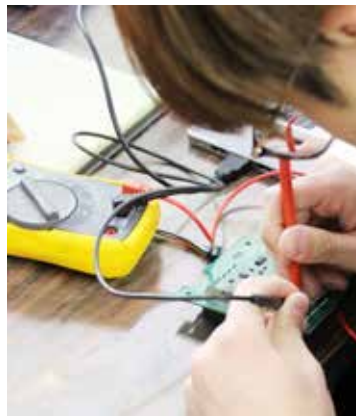
鶴文乃さん

平和賞受賞で、日本被爆協が訴えてきた原爆被害に世界中の注目が集まった。長崎に原爆が投下されたのは1945年8月9日午前11時2分。爆心地から約4.5離れた山奥の疎開先で被爆した。当時4歳で、母が亡くなった。父と16歳だった長兄は爆心地近くの工場で被爆し、全身に大やけどを負った。疎開先まで帰ってきたものの、2人とも数日後に亡くなった。

広島・長崎とは比べものにならない被害をもたらす核兵器もある。一度でも使用されたら、数えきれないほどの人間が亡くなり、放射能の影響は世界中に拡大するのではない。人間は過去から学ばずとしない。被爆者の訴えに耳を傾け、世界中の人々が当事者意識を持つてほしい。

被爆者は近い未来にいなくなる。未来をどうつくりたいかは若者たちにかかっている。自分たちの手でどんな社会を築いていきたいのか。真面目な話をするのを怖がらず、友人同士で議論することが大切だ。他人任せではなく、自分たちが社会を担うという主体的な意識を持つてほしい。

衛星の開発では、いき



回路にプログラム通り電気が流れるか確認するメンバー(1月16日、総合研究棟Bで)

と、治具が激しく揺れてしまい、衛星の試験に必要な振動が適切に伝わらない恐れがある。そこで、打ち上げ時に加わる数値から3000分の1程度の振動を水平方向と垂直方向から治具に加え、共振しないことを確かめた。担当した鈴木穂高さん(工芸2年)は「今後は、治具に衛星を入れて振動試験を行う。治具が共振しないことが確かめられ、一歩前進できた」と話した。

試験は3月までの予定だ。問題がなければEMを完成させ、「熱真空試験」に進む。開発は大詰めを迎えつつある。(青野心平(物理学類2年写真も))

「未来は若者たちにかかる」
被爆者2人からの伝言 被団協に平和賞

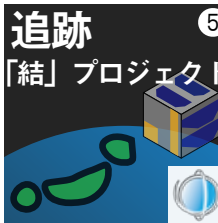
核兵器廃絶を訴えてきた被爆者の全国組織「日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)」が昨年12月、ノール平和賞を受賞した。今年は戦後80年。つくば市在住の2人の被爆者、村上啓子さん(87)と鶴文乃さん(83)に受賞の意義や若い世代に期待すること聞いた。「未来は若者たちにかかっている」と2人は口をそろえた。(川上真生(社会学類3年、川畑悠成(知識情報・図書館学類1年))

ての人たちが一緒に受け取った賞だと思う。証言を続けてきて思うのは、証言を受け取ってくれるかどうかは受け手次第ということだ。九州のある高校で被爆証言をしたことがある。自由参加で2人しか聞き手がおらず、引率の教師に謝られた。翌年も一度証言に行く、約150人の生徒が集まった。2人が周囲に話を広めてくれたのだ。

「世界中が当事者意識を」鶴文乃さん(長崎で被爆)

また意義は大きい。関係者の高齢化が進む中で、今後の活動の妨げにもなるだろう。その一方で受賞がもう少し早くても良かったと思う。長崎に原爆が投下されたのは1945年8月9日午前11時2分。爆心地から約4.5離れた山奥の疎開先で被爆した。当時4歳で、母が亡くなった。父と16歳だった長兄は爆心地近くの工場で被爆し、全身に大やけどを負った。疎開先まで帰ってきたものの、2人とも数日後に亡くなった。

被爆者は近い未来にいなくなる。未来をどうつくりたいかは若者たちにかかっている。自分たちの手でどんな社会を築いていきたいのか。真面目な話をするのを怖がらず、友人同士で議論することが大切だ。他人任せではなく、自分たちが社会を担うという主体的な意識を持つてほしい。

追跡「結」プロジェクト
動作試験始まる
「点と点が線になる」

筑波大が中心となって超小型衛星を開発する「結」プロジェクトは、衛星「TSUKUTO」に搭載する電子機器などパーツの動作試験を始めた。終了後は試験機(エジンニアリング・モデルEM)を組み立て、宇宙空間で衛星が動作するかどうかを調べる。熱真空試験を実施する。それが済めば、宇宙空間に打ち上げる実機(フライト・モデル、FM)の製作が始まる。

衛星の開発では、いきなりFMを作ることはない。EMで各種試験を実施し、打ち上げ時の衝撃や宇宙空間の高熱に耐えられるかなど設計の妥当性を検証後にFMの製作へ進む。

衛星の通信などに使うプログラムを開発した「コマンドアンドデータハンドリング(C&Dh)系」のメンバーたちは、メモリーにプログラムを書き込み、回路の電流値が正常であることを確認した。担当した黒河一真さん(工芸1年)は「試験では、他のチームが設計した回路の動きも分か

計を担当する「熱・構造系」のメンバーは衛星を振動試験機に固定する治具が振動に耐えられるかを検証した。物体にはそれぞれ揺れやすい振動数があり、固有振動数と呼ばれる。治具に加わる振動数と治具の固有振動数が一致すると、共振し、振動が増幅される。そこで、打ち上げ時に加わる数値から3000分の1程度の振動を水平方向と垂直方向から治具に加え、共振しないことを確かめた。担当した鈴木穂高さん(工芸2年)は「今後は、治具に衛星を入れて振動試験を行う。治具が共振しないことが確かめられ、一歩前進できた」と話した。

試験は3月までの予定だ。問題がなければEMを完成させ、「熱真空試験」に進む。開発は大詰めを迎えつつある。(青野心平(物理学類2年写真も))

編集後記

今号から編集部が新体制となりました。新メンバーならではの紙面をお届けしていきます。▼本紙マスコットキャラクターが「つくし」に決定しました(1面)。これから一緒に紙面を盛り上げてくれるはずですよ。▼緊急性が低いのに救急搬送された患者を「選定療養費」の徴収対象とする制度の開始(1面)や、地球温暖化対策を意識した学食メニューのカーボンフットプリント(CFP)表示(2面)は、筑波大生の生活にも直接関連する話題です。(編集長・山本貴世(国際総合学類2年))

次号は4月2日(水)発行予定です

発行所 筑波大学印刷工房

編集・発行 筑波大学新聞編集委員会

編集長 山本貴世(国際総合学類2年) 副編集長 松尾有希(比較文化学類1年) 川畑悠成(知識情報・図書館学類1年) ほか編集部員21人